

学生時代と図書館 51

— 書庫の閉塞感と解放感 —

枝元 益祐

私にとって図書館とは、切っても切れない存在である。それは私が司書課程の担当ということもさることながら、学生時代より欠くことの出来ない学習拠点であり、基地であったからである。

そもそも、太宰治の『惜別』に於いて描かれた魯迅の深い心情に触れ感銘を受けたり、中沢新一の『雪片曲線論』に於いての見事なまでの思考に触れ魅了された私は、そういったモノに触れたくて、或いは、そういった論考を深めたくて、国文学の世界へと足を踏み入れた。こうして文学部に於いて本格的に文学を学ぶに伴って、書籍中心の生活になったわけであるが、当然の如く、その学習活動の中心は図書館になった。常に新たな作品の発見や考察を見つけたくて、大学の総合図書館や学部の専攻図書館のみならず、公共図書館や文書館に行っては資料を漁っていた。

そんな中でも、閉架書庫が一番のお気に入りだった。目録カードやOPACで検索し、目当ての資料が閉架であったならば、図書請求用紙に必要事項を記入し図書館員による出納を待つというシステムであった。当初はそれで満足であった。が、1度の出納冊数は限られており、目当ての書籍の関連があるであろう前後の資料を漁り見ることもできないことから、自分で閉架書庫に入庫し自らの手で探し出したいと強く願うようになった。自身で閉架書庫に入庫する為には、学内実施の講習を受け、最終試験に合格する必要があったが、司書課程を履修していた私にとっては何の問題もなく、晴れて入庫証をその手にすることが出来た。

およそ書庫というものは薄暗く、黴臭いものであるが、それが堪らなく心地よく、静寂そのもので落ち着きがあり、私にとっては、宛ら文学の為の「秘密基地」であった。書店とは違い、明るさや賑やかさもなく、また現在のようにコンピュータ管理されているわけでもない。極めて不便で閉塞感のある空間であった記憶がある。そのことは、書庫そのもの

が閉架ということもあり、殆ど人の出入りがない為、恰も個人の書斎であると同時に、周囲総てが書籍に囲まれた、小さいけれども「閉ざされた世界」であったといえる。

特に、文学部の国文学専攻ということもあり、学習スタイルやテーマ設定は個人の興味・関心に委ねられており、私が求める文献群は(何故か?)他の学生の関心対象ではないらしく、結構自由に利用することが出来た。

斯くして、お気に入りの「閉ざされた世界」に埋没しつつ自己の思考を深めていったわけである。それは「閉ざされた」という意味に於いて、圧倒的に限られていたといえよう。出来ないことだらけであった…最新の書物やベストセラーは勿論のこと、インターネット(DOSで動く各種データベースはあったが、どれもこれも矢鱈と操作が難しく、LoginにIDやパスワードが必要だった!)や他の図書館の情報や書誌などは利用不可能であるという意味に於いて、やはり限られていた。がしかし同時に、そんな中であって「無限」の可能性を見出してもいた。限られているといっても、その総てを活用し尽くすことなんて到底不可能である。であるからこそ、その有効な活用方法を模索することになる。その過程で見えたことであるが、様々な資料の繋がり…文学者同士の影響関係、本歌取りの読み解き、変体仮名の翻刻…国文学のゼミの授業では、到達目標しか与えられず、その道のりは学生各自が編み出しながら文学を体現化していくという指導方針であった。その為、如何なる活用方法を編み出し、文学を紡ぐのが各学生の力量の見せ所であり、自己表現であった。そういった活躍の場を「閉ざされた世界」に見出した私は同時に、実存を具現化する為の無限の可能性を垣間見、その中に「開放」を発見するに至るといふ、極めてパラドキシカルではあるけれども、確かにそこに存在したドラマツルギーを感じていた。これが、私が学生時代に抱いた図書館観である。



えだもと ますひろ (講師・図書館情報学)